

ふるさと再発見

シマバライチゴ自生地

島原まゆまロードの千本木入口からしばらく登っていくと、左手（眉山側）に「島原のシマバライチゴ自生地」の看板が見えてきます。

この一帯約1ヘクタールがシマバライチゴの自生地として昭和35年に県の天然記念物に指定されています。

シマバライチゴは、明治37年、国見町出身の植物研究家・大島清さんが発見し、植物学者として有名な牧野富太郎博士により命名されました。

シマバライチゴは、バラ科に属し、東南アジアから中国南部、台湾に分布



しており、日本では長崎県と熊本県で確認されています。



シマバライチゴのつるは細く、強く長さ5メートルにも達し、9月頃には白色の小さな花が咲き、冬にはぶどうのように房状に赤い実を付け、口にすると、とても酸っぱい味がします。

雲仙・普賢岳噴火災害が発生した頃は、その周辺が警戒区域に指定され、火砕流や土石流の被害が心配されましたが、災害を耐え抜いて今も元気な姿を見せています。

シマバライチゴは、市民グループの保護活動により、この他にも市内数カ所で見ることができます。

島原の名の付いた貴重な植物。みんなで大事に守っていきましょう。

クローズアップ Close Up!

「みんなでスクイを造ろう会」

今月号の表紙で紹介しているスクイですが、島原半島内で一番古いものは1707年に造られ、最盛期の明治25年には216基ものスクイがあったそうです。しかしながら、時代の移り変わりにより、スクイの数は減少し、市内で形が確認できるものは、新田町の海岸にあるものだけです。

そのスクイも長年の風雨や波などにより一部壊れていたためスクイを復元しようと、平成18年から補修作業を行い、平成20年に会が結成されました。

現在、この会による修復作業により、スクイは昔の形に復元



され、子どもたちを集めて、スクイでの魚取り体験なども行われています。



スクイは波により崩れることがあるのため、年に2回程度、会員や有志が集まり修復作業を行っているそうです。

会長の中山春男さんによると「スクイは先人の知恵で造られた歴史的な遺産です。これを後世に伝え、多くの人に知ってもらいたい」と話してくれました。

次回は10月3日(日)に作業を行う予定にしているそうで、スクイに興味がある人や修復作業に参加したい人は「みんなでスクイを造ろう会」事務局（内田豊さん ☎07298）へ。